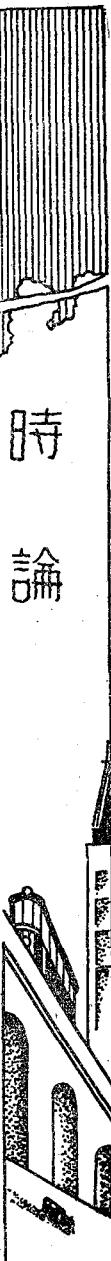


關門架橋よ何處へ行く



田中好

東京から西して鹿児島に達する二号國道が、關門海峡を横ぎるところ、即ち下關門司市間には架橋の設備がなく、海上渡船に依るの外無いのであるが、道路附屬物としての渡船設備もなく、鐵道省經營の連絡船と民間二三會社の經營する汽船とに依る状態であつて、自動車が發達し道路交通の勢力範囲が擴大された今日に於ては、本土と九州とを結ぶ國道設備として不十分であることは今更言ふ迄もない、そこで何等かの方法に依つて連絡の完備を期せねばならぬとは、屢々本誌に於て所論したところであつたが、政府も亦其の聲に聞いて確か昭和七年度と記憶するが、道路改良費豫算の内に關門國道調査費を計上するやうに爲つて

其の後は毎年度豫算に編制され、吾人は政府の此調査に對し期待する頗る多いものがあつた、夙聞する所に依れば此調査の結果として矢張り架橋が道路交通よりして最も適當であるとの成案を得たと言はれてゐるが、未だ其の實現方法の具體化を見ないのは頗る遺憾に堪へないのである。

固より架橋の爲には二千萬圓餘の經費を要し、國庫財政の窮乏せる今日に於て架橋の即行を望むことは困難であると言ふ說もある。併しながら當時筆者が所論したやうに、自動車交通範囲内に於ける自動車發達の趨勢と、關門間單獨交通の状況からすれば橋梁交通の利益は架橋後數年にして架橋費を償つて餘りあるのであるから、唯だ財政難に藉

口していくまでも此事業を閑却することは策の得たものではない、或は軍事上の見地からして之を否定する向もある。通行人が下關要塞を眼下視することや、敵飛行機の襲來に依つて落橋時を想定して反対するのであらう、併しながら要塞地帯の祕密を保持することは科學の發達してゐる今日に於ては、要塞地帶内施設自身の改良と架橋技術の應用とに依つて左程困難な問題ではない、飛行機襲來の場合に於ける危險を所論するが如きは、餘りにも我が軍部の威力を輕視するものであつて、皇軍の勢力を以てしては敵機を此處に至らしむるが如きは斷じてあるべからざる所である、吾人は財政悲觀論者や戰時恐怖論者の言を排して政府が速に架橋計畫の實現を計ることを所望して已まない。

近時傳へらるゝ所に依ると、鐵道省に於ては是も多年研究してゐた關門海底隧道を十一年度から着手すると言はれてゐる、現行案の内容は發表されてゐないが、下關側幡生から彦島を通じて門司側大里まで陸上九キロ、海底一キロ六の間に海底隧道を掘鑿し、單線一本とする外自動車道を設ける計畫である、工事費三千六百萬圓で四ヶ年繼續事業とすると傳へられてゐる、而かも自動車道の通行に對して通行料を徵收して元資の償却に充當する計畫である。此計畫も實現すれば無よりは勝るのであるから寛に結構ではあるが、同じ經費を投するに在らば交通の大局からして判斷し利の存する所のものを實現せしむるのが當然である。橋梁案と隧道案共に其の獨異性を有してはゐるが、道路を隧道式に依つて築造するときは延長二糠六九の隧道との外に一三糠六九の道路の新設を必要とし、隧道幅員十二米、道路幅員二十二米として勘定すると、工事費三千九百萬圓を要し、橋梁を架設するものとして勘定するときは、總延長六糠四一、橋梁〇糠九一、道路五糠五〇、幅員橋梁に在つては二〇米、道路に在つては二十二米として設計し、工事費二千七十萬圓を要すると傳へらる、其の兩者を比較するに橋梁案は隧道案を凌駕する、即ち工事費に於て既に千八百三十萬圓安く出來るのである、其の利用價値に就て見ても隧道に依るときは殆んど自動車のみの交通に利用せら

るゝに反し、橋梁に依るときは獨り自動車のみならず一般道路交通物體たる牛馬車、自轉車、歩行者等の自由交通に供せられ、交通價値の大なるを知る、其の外隧道案に依れば下關門司兩市を直接に連絡し得ないことゝ爲つて兩市の發展を阻害することゝ爲る、又之を技術的に見ても橋梁案は隧道に比し交通距離を短縮して道路交通の質を擧げ得るの外工事の施工容易にして維持費を節約し得るの特質を有するのである、唯だ強て橋梁案の缺點を求むれば、橋梁路面高が海面上六十米以上と爲つて不利なる點に過ぎないのである、

従つて吾人は以上の特質と現在及將來に於ける道路交通との状勢に、「へ橋梁案の實現を要求して已まない」のである。

或は鐵道の隧道計畫に附帶して道路を築造すべきことを所論する者もあらう、併しながら道路交通と鐵道交通とは各其の任務を異にするが故に、其の施設も亦自ら異らざるを得ないのであつて、道路交通が沿道交通を目的とするに不拘、關門兩市の交通に何等寄與し得ないとすれば、既に道路設定の目的を失ふに至る、又道路交通は所謂一般物體

の交通に供するに在るに不拘、獨り自動車のみの交通に止るとせば是亦道路設定の要件に反するに至るのである、況んや鐵道に附帶して道路を築造するとしても、道路の爲に架橋以上の経費を要するものなるに於ておやである、唯だ道路を築造すれば責を免ると言ふが如き無責任なる見地に於て隧道式道路を築造せむとするに在らば即ち已む、然らずして道路本來の目的と使命とに鑑み道路を設定せむとするに在らば附帶道路説の如きは、我が路政界より排すべき愚論と言ふべきである。

内務省が架橋案の調査に從事してより約三年、いかに暢氣でも既に成案を得てゐる筈であるに不拘、尙之が具體化せざる所以は奈邊に存するのであるか、吾人をして疑はざるを得ざらしむる、軍部の反対あるとせば之が事由を公表して世論に問ふが可い、唯だ軍部の一部意見に抑制されて躊躇逡巡する如きは吾人の採らざるところ、關門渡船の爲に交通の不便を體験しつゝある九州各縣の有志も亦何が故に起つて之を問はざるやを疑ふ、「關門架橋よ何處へ行く」の言葉を呈して政府の反省を求める。